

V. 2. 新任教員のプロフィール〈自己紹介〉

○豊中キャンパス

言語文化専攻

言語文化比較交流論講座 准教授

三浦 あゆみ

2017年9月から言語文化比較交流論講座および英語部会に所属しています。前任の尾崎久男先生には学会を通して大変お世話になりました。尾崎先生の急逝による後任のポストがまさか自分に巡ってくるとは思っていませんでしたが、言文の先生方や職員の皆様に着任前から大変細やかなお気遣いを頂いたお陰で、新たな環境で順調なスタートを切ることができました。この場をお借りして改めて御礼申し上げます。

私は東京で生まれた後、幼稚園から高校卒業までを長崎で過ごしました。大学からは東京に戻り、東京外国語大学（学部）→東京大学（修士）→イギリスのマンチェスター大学（PhD）と渡り歩いた後、前任校での勤務に伴い、5年前から大阪で暮らしています。「大阪は日本のマンチェスターである」という一説があったり、豊中キャンパスの近くに身内が住んでいたり、大阪大学出身の親しい友人がいたり、大阪（大学）にはご縁を感じています。また、人の話し方や振る舞いには今でも新たな発見があり、大阪の「言語と文化」を日々学んでいます。

専門分野は英語史です。大学に入るまでは無知だった分野ですが、ゼミの先生に勧められた本を読み、関連する講義を受講するにつれてその魅力に惹かれ、今に至ります。学部頃から主に古英語・中英語の統語法に関心を持っていますが、留学を経て意味の変化、語彙の変遷、辞書と言語研究、言語理論や近年は近代英語にも興味の対象が広がりました。エディションやコーパス、辞書から抽出したデータを精読して論を構築するという実証的な研究手法を常に取っていますが、その成果はPhDの指導教員たちが入手できるように、国際的な学術誌に出版することを心がけています。また、春休みや夏休みにはヨーロッパの国際学会で研究発表をし、留学時代の友人・知人たちと旧交を温めるとともに、新たなネットワークを築くこと（と街歩き）を楽しみとしています。

大阪大学は英語史やフィロロジー、中世英語英文学の伝統があるため、図書館の関連蔵書が充実しており、研究において既に多くの恩恵を受けています。教育面では、今のところ全学共通教育科目の英語に専念していますが、どのクラスでも、専門科目であるかのように予習やテスト勉強、課題に驚くほど真剣に取り組む受講者がいたことが印象的でした。初年度の反省点を踏まえ、新年度では受講者にとってより良い授業を展開できるよう努力したいです。次年度から始まる大学院修士課程の授業では、自分の専門に関する内容を学生の皆さんと共有することで、私自身も多くを学べればと思っています。

今後も活動の場を国内のみに留めることなく、教員・研究者として引き続き研鑽を積むとともに、東大時代の指導教員から用命を受けた「将来の英語史の分野を担っていく後進の指導」を達成するような人材に成長できればと思っています。引き続きご指導ご鞭撻のほどどうぞよろしくお願い致します。

言語文化専攻

言語文化システム論講座 准教授

林 千宏

生まれは大阪の枚方、幼稚園から中学まで豊中、高校で上本町とやや南に下ったものの大学は再び豊中でしたので、大阪人というより北摂（豊能）人といった方がよいぐらいの地元密着人間です。これだけ狭い世界で生きておりましたので、小さなころから本、とりわけ遠い世界を舞台にした物語を読むのが好きでした。映画にも熱中し、高校生の頃は学校帰りにこっそりと洞穴のような小映画館に通う、という生活を送りました。大学生になると、今度は音楽、特にバッハに熱中。それが高じて入ったアマチュア合唱団ではバッハの大曲をすべて歌いました。

こうしてその時々で色々な芸術に夢中になりましたが、私が大学で専門に選んだのはフランス文学、とりわけ 16 世紀の詩です。出会いは大学の授業、言語文化研究科の高岡幸一先生の授業でした。私は学部 2 回生でしたが、先生から渡された詩は見たこともない綴りのフランス語で、苦勞して解読すると「私のかわいい小夜鳴鳥よ、枝から枝へと飛び回り…」と、小夜鳴鳥の恋を歌った詩でした。まるでいきなり腕を掴まれ、森の中まで引きずりこまれるようなこの詩に何とも言えない快感を覚え、現代の日本からは時間も距離も遠く離れた 16 世紀フランス詩の森にふらふらと足を踏み入れたのが運の尽きです。以来、想像を絶するほどに奥深かったこの森で迷い、出てこられずにおります。

さて、16 世紀フランス詩の森に迷い、大阪を離れられずにいた私も、大学を卒業すると京都、その後は東京の大学で働くことになり、わずかではありますが「現実の外の世界」も知ることになりました。そして昨年、久しぶりに戻って来た大阪大学では、懐かしさと同時にこれまでに気づかなかったこと、そして変化にたくさん気づくことになりました。私も「外の世界」を多少なりとも知ったからこそ、気づくことができたのかもしれませんが。言語文化研究科に移ってきて改めて気づいたのは、分野を超えて先生同士また学生の皆さんとの距離が近いことです。やはり我々の研究分野では様々な垣根、国境を越えた知的交流が大切です。その意味ではこの環境は理想的で、大きな刺激を受けております。

さらに、授業環境も随分と変わっておりました。先端機器が次々と取り入れられていて、アナログな私は圧倒されましたが、こうした新しいものにもぜひ挑戦していきたいと思っ

ております。こんなふう新しいことに挑戦しようと思えるのも、阪大の雰囲気が実のところ私の知っているものとあまり変わっていないからかもしれません。総じて学生さんは授業では前向きで、積極的に発言、質問をしてくれるため、よい緊張感があります。こうした関係が変わらず土台にあるからこそ、新しいことを試していけるのだと思っております。阪大に来てはや 1 年。これからもこの恵まれた環境、そして特有の雰囲気を大切にしつつ、新しいことにどんどん挑戦していけたらと思っております。

言語文化専攻

言語コミュニケーション論講座 准教授

榎本 剛士

季節の匂いというのは面白いもので、あの時・あの場所をどこか思い起こさせるところがあります。2017 年度も終わりに近づいた 2018 年の 3 月、温かな春の陽気に包まれたある日、B 棟の前を歩いていた私にふと、舞い降りてきたのは、「引越し」の感覚でした。

愛知県の西三河地方で生まれ育った私は、高等学校卒業後、学部はアメリカ（南部・アラバマ州）、大学院と初めての任期付き専任職は東京、そして、初めての国立大学での任期なし専任職は金沢、といった具合に、人生のステージ毎、場所を変えてきました。そうしたこともあってか、「最初」しか味わうことのできない、自分の全く与り知らぬところでその場所の歴史を紡いできた人々の雰囲気や、新参者として初めて足を踏み入れる建物の廊下が醸し出す異界のような佇まい、そして、そこが少しずつ自分の居場所になっていく感じがけっこう、好きです。

そんな気分誘われるまま、なお想いを馳せてみると、言語文化研究科との不思議なご縁に、得も言われぬ「思い入れ」のようなものがどうしても湧いてきます。

立教大学の大学院で修士論文を書き終えた私は、博士後期課程の受験に失敗し、一年間の（悔しい）浪人生活を送りました。次のチャンスで、言文を含む複数の大学院を受験したところ、結果はなんと、すべて合格。周囲のアドバイスを聞かず、言文を選ばなかった私は（審査して下さい先生方、本当にごめんなさい！）、引き続き立教大学異文化コミュニケーション研究科で、語用論と言語人類学を軸に自分の学問的基盤を固めつつ、四年目には、高校の英語授業のフィールドワークに一年間、従事しました。

金沢大学外国語教育研究センター（現国際基幹教育院外国語教育系）の公募のお知らせを頂いたのは、その翌年、いよいよ博士論文の執筆に本腰を入れて取りかかろうとしていた時のことです。色々な事情はありましたが、「これは、GO です」という指導教員の一声に背中を押されて応募の意思を固め、幸いにも、金沢大学でお世話になることとなりました。

金沢で過ごした 6 年の間、大学には大きな動きがあったものの、公私ともに人に恵まれ

たお蔭で、生活そのものに不満はありませんでした。しかし、その一方で、専門の教育に携わることができないまま大学人としてのキャリアを終えていく将来がぼんやりと見え始めていました。そのような状況下、半ば焦燥に駆られた私のもとに舞い込んできたのが、言文言語コミュニケーション論講座から出た「社会言語学・異文化コミュニケーション・語用論」の公募の知らせです。今度は妻からの「GO」の一声を得た私がここで「動く」決心をするのに、さほどの困難はありませんでした。そして、事態が「採用」の方向へ（本当に！）展開していくなかで覚えた高揚感が、就職に合わせて大学院を退学した後、遅々として進まなかった「博論」^{ハクロン}を仕上げるための強力な相棒となってくれました。

君は、諸々もう少し整えてから阪大に来なさい。そんなメッセージを「学問の神様」から勝手に受け取った気になっていた私の言文での初年度を一言で表すと、「言文の教員になるための長い引越し期間」という言葉がピッタリのような気がします。昨年度は、金沢の中学校に週一回通い、教室談話などのデータ収集を行いました。また、一年目の校務を軽くして頂いたことで、大学院のシラバスを少しゆっくり考えたり、今後の研究の方向性やこれまでフィールドにしてきた「英語教育」に対するスタンスを定め直したりする大切な時間を得ることができました。

国公立問わず、大学は大きな変革の時期を迎えています。これまでの職場では望んでも得られなかった環境が言語文化研究科にあると感じています。少し遅れた「心の引越し」をようやく終えたここからが本当のスタート、どんなこともできるだけ楽しく受け止めながら、進んでいきたいと思えます。

言語文化専攻

英語部会 特任准教授

Luke MALIK

I'm from England, but currently I'm working and researching in Japan. I completed my undergraduate degree at Birmingham University and Master's degree at Warwick University in England. I completed my PhD. studies at Osaka University in Japan. During that time, I also received a grant and spent some time researching in Australia. My PhD. focused on examining issues intersecting the philosophy of mind and the philosophy of language. During this time, I also taught English language courses and I currently teach both Philosophy and English language courses at Osaka University. My current research is focused on linguistic issues relating to category mistakes, meaning, and metaphor. I'm also interested in the philosophy of linguistics and applied linguistics, and hope to pursue further research in this field. I, also, occasionally write about Japan and its culture.

言語文化専攻

フランス語部会 特任准教授

Benjamin SALAGNON

(バンジャマン・サラニョン)



I'm from a small town near Lyon, in the southeast of France, where I was born and raised.

Have you ever heard about Lyon? Lyon is designated as a UNESCO World Heritage site for its historically important areas, and is also well known for having been an important place for the production and weaving of silk. Lyon also played a significant role in the history of cinema: it is where Auguste and Louis Lumière invented the cinematograph. It is also very famous for its gastronomy (with Paul Bocuse as a figurehead) and for its light festival, the Fête des Lumières, which begins every 8 December and lasts for four days, earning Lyon the title of Capital of Lights.

As for me, I did all my undergraduate and graduate studies at The University of Lyon III, where I first dedicated myself to the study of French law, then Japanese. Once determined to find a job where I could use my knowledge of both fields, my encounter with teaching in 2007 totally changed my career plan: a Master's degree student back then, I had the opportunity to teach the basics of the Japanese language and culture to university's first year students and absolutely loved it. From then, my teaching experience has been quite uncommon as I have alternatively taught Japanese and French, at least till 2014: I was a full-time French lecturer at Yamanashi University for two years, then went back to France to teach Japanese for two years at my home university and then, in 2014, had an opportunity to work at Doshisha University, where I taught French and was also in charge of a lecture on French and Japanese cultures.

I have been working at Osaka university for a year now and find it a very comfortable place not only to teach but also to do my research about Japanese literature (especially Murakami Haruki's works) and its reception in France. I especially like to draw connections between my research activity and teaching, especially when doing translations in the advanced French class, and therefore hope the students could improve not only their French skills but also their understanding of a foreign culture and a foreign way of thinking.

○箕面キャンパス

言語社会専攻（中国語）助教

中田 聡美



2017年4月より、言語文化研究科・言語社会専攻（中国語）の助教として着任いたしました中田聡美です。修士課程、博士課程を過ごした母校である大阪大学で教壇に立つことができ、非常に嬉しく感じております。専門は中国語学で、現代中国語のシンタクスに興味、関心を持っています。

まずは私の略歴についてです。2006年、広島大学総合科学部に入学し、中国語を学び始めました。大学の授業の中で中国語の授業が最も好きで、北京オリンピックが終わったばかりの2008年9月から2009年6月まで、交換留学生として北京師範大学漢語文化学院に留学しました。その後、さらに中国語に関する理解を深めたいという思いから、2010年に大阪大学大学院、言語文化研究科・言語社会専攻に入学し、2012年に修士号を取得しました。2012年に同大学院博士後期課程に進学し、2013年9月から2014年7月まで、「孔子新漢学計画・中外合作培養博士項目（孔子新漢学計画・中外提携博士養成プログラム）」を利用し、北京師範大学漢語文化学院に留学しました。二度目の留学では、北京師範大学での指導教官（張和生先生）の下で研究を行い、先生との共著で論文の執筆も行いました。中国から帰国後、大阪大学に博士論文を提出し、2016年に博士号を取得しました。

次に、私の研究についてです。私は現代中国語のシンタクスに関心があると述べましたが、特にモダリティ（modality）に関する問題に興味を持っています。例えば、中国語に“是”という語があります。最もよく知られているのは“我是学生。”（私は学生です）のような用法で、英語のbe動詞のような働きをしているように見えます。しかし中国語では、その“是”がモーダルな意味を持つ副詞として現れたり、また他の文法成分（接続詞や副詞）に付属する意味の希薄なものとして現れたりします。そこで“是”はモダリティの表出とどのように関わっているのか、また他の成分との相互作用で、どのような話者の感情や態度を表し得るのかといった問題をこれまで研究してきました。

最後に、大阪大学に着任して1年が経ちました。大学での教歴も短く、まだまだ未熟ではございますが、まわりの先生方に励まされ、フォローいただきながら、大阪大学で充実した日々を過ごしております。このような環境にいられることに感謝し、1日でも早く、大阪大学の一員として貢献できるようになりたいと思っております。また、教育と研究を楽しみつつ、先生方、学生のみなさんから学び続けることを忘れずに、日々努力してまいりますので、今後ともどうぞよろしく願いいたします。

言語社会専攻（ビルマ語）講師
大塚 行誠



大塚行誠（おおつか・こうせい）と申します。2017年4月より言語文化研究科に助教として着任し、同年10月から講師としてビルマ語と言語学を教えております。

生まれは千葉、育ちもほぼ東京近辺ですが、小学生の頃、父の転勤で数年程福岡に住んでいたことがあります。その福岡で、私は言語の虜になりました。転校先ではクラスメイト達の話す方言がとても格好良く聞こえ、「自分も『方言』をモノにしたい！」と思うようになりました。そこで、放課後は地元の友達と遊ぶ傍ら、彼らの助けを借りて言語調査さながらの、今思えばかなり本格的な方言の練習までしていました。（まさか30年後の自分も同じようなことをしているとは…。）

当時の福岡は、ちょうど「アジア・太平洋博覧会」と呼ばれる国際的なイベントの真最中でもありました。街の至る所で様々な形の文字を見かけ、エキゾチックな響きの言葉を聞きました。こうした光景を目の当たりにして、「同じ人間同士なのに、響きの違う方言、互いに全く理解できない言語まで使っている。世界はこんなにも自分の知らない文字や言葉であふれているんだ！」と子どもながらに感動し、奥深い言語の世界に独り興奮していました。

いつか海外に行って色々な言葉に触れてみたいと思っていた私は高校を一年間休学し、マレーシアに留学しました。そこで出会った親友は、授業中にマレー語、課外活動に英語、休み時間に中国語（普通話）、ガールズトークに広東語、家族に客家語、近所の人には福建語を話すというツワモノでした。こうした多言語話者自体東南アジアでは珍しくないのですが、長いこと日本でモノリンガルの生活を続けていた私にとってはかなりショックを受けました。こうして、東南アジアの言語事情についてもっと知りたいと思うようになり、東京外国語大学でビルマ語を専攻した後、東京大学大学院では言語学を学びながらミャンマー少数民族の言語研究を始めました。

現在、私が研究の対象としている地域はミャンマーとインド北東部にあります。毎年フィールドワークに出て、クキ・チン語支と呼ばれる言語グループの音韻や文法について調査しています。クキ・チン語支には約50もの言語があると言われますが、同一言語の中でも方言差は大きく、実に複雑な言語事情を抱えています。しかし、一見ばらばらに見えるそれらの言語も、言語学的なアプローチから細かく分析してみると、語彙や文法に共通した特徴を見出すことができます。一つ一つの言語が様々な形で存在しながらも、実は互いに繋がって

いるという、多様性と共通性に惹かれながら言語データを集め、文法書や辞書を記述してきました。

人生初の大阪暮らしから一年余りが経ち、私の生活自体も漸く落ち着いてきております。これまでの研究と教育の経験を活かし、一日でも早く皆様のお役に立てるよう、より一層努力してまいりますので、ご指導のほどどうぞよろしくお願いいたします。



言語社会専攻（アラビア語）助教
仲尾 周一郎

2017年4月に言語文化研究科に赴任いたしました仲尾周一郎と申します。アラビア語や中東地域の社会・文化に関する授業を担当していますが、実のところ、中東地域やいわゆるアラブ地域に行ったことはほぼ皆無です。なにやら胡散臭い経歴ですが、この場をお借りして弁明させていただきたいと思います。

アラビア語専攻の一年生の授業では、「アラブ」・「中東」（北アフリカを含む）・「イスラーム共同体」といった概念が、重複する部分はあるものの、基本的にはそれぞれ独立したものとして理解する必要があるということが前提として導入されます。その際、「アラブ」をアラビア語（＋イスラームの信仰や文化）を自らのアイデンティティの支柱とする集団と定義することが基本的な理解だと教わる人が多いでしょう。私はむしろこうした「基本」に批判的な目を向けつつ、主に東部アフリカをフィールドとし、同地域で話されるアラビア語接触変種やその話者集団に関する言語学的地域研究を行ってきました。

言語接触到に起因する興味深い言語特徴・言語現象もさることながら、東部アフリカではアラビア語とアイデンティティの非典型的な関わりが見られます。例えば、南スーダン人の多数は「アラブ人」でもムスリムでもないどころか、南スーダンにはアラブ・イスラーム主義政策を推し進めた北部スーダン政府との長い紛争の末、2011年に独立したという背景があります。しかし、南スーダンではジュバ・アラビア語と呼ばれるアラビア語クレオールが地域共通語として広く用いられ、それが独立後もナショナル・アイデンティティの一部として発展しつつあります。また、エチオピアのマユ人と呼ばれる人々は、主にスーダン系アラブ人に父系ルーツをもつムスリム・コミュニティですが、自分たちが幼少時から話す独自のアラビア語変種をアイデンティティの一部としています。しかし、彼らは自らを「アラブ人」

ではなく、むしろ母系の土着エスニック・グループであるベルタ人の一部であると考え、アラビア語はあくまで「第二言語」、ベルタ語が「第一言語」だと考えています。このほかにも、東部アフリカにはアラビア語変種を母語かつエスニック・アイデンティティの支柱とし、かつ自らを「アラブ」とは考えないコミュニティの例は枚挙に暇がありません。

一見奇異に見えるこの現象は、西洋出自のいわゆる「世界語」に目を向ければ、ケベック人のエスニック・アイデンティティの拠り所としてのフランス語、シンガポールのナショナル・アイデンティティの拠り所としての英語など、実は珍しいことではありません。つまり、アラビア語をアイデンティティの支柱とする人々を「アラブ」と定義する単純な図式は、アラビア語の「世界語」としての側面の看過しているのではないかと、ともいえるかもしれません。今後、同僚・学生の皆様と一緒に、こうした議論を深められればと期待しています。宜しくお願いいたします。

日本語・日本文化専攻
日本語・日本文化講座 助教
永原 順子



大阪大学に着任してからあっという間に1年が経とうとしています。先生方、職員の皆さま、学生さん達、本当に多くの方に支えていただきまして、ありがとうございます。以下、諸事情により、略歴と研究の紹介が入り混じっておりますが、よろしくお付き合いのほどお願いいたします。

中学生の頃から小松左京の小説に没頭していた私は、大学進学にあたり「この人の行ったところなら面白いところに違いない！」という単純（不純？）、かつ強烈な信念で必死に勉強し、なんとか京大文学部に入学しました（入学後、勢い余って小松左京本人に会いに行くのですが、それはまた別の話、ですので詳細は割愛します）。

そして予想通り、能楽部という“面白い”部活動と出会い、舞や謡の実践を通じて能の世界へ足を踏み入れます。「好きなものを研究対象にするのはよくない」という反対を振り切って、卒業論文は中国文学の視点から、修士論文および博士論文は宗教民俗学の視点から、能のいくつかの事象についてまとめました。最近注目しているのは、能における擬人化の意義です。能では、様々なシテ（主人公）が登場します。人間（生身、靈魂）も多いですが、神霊や鬼神、精霊なども描かれます。草木の霊が人の形となって現れ、思想や世界観を語る

こともあります。人間は、自らを取り巻く世界（可視・不可視に関わらず）から常に影響を受けています。それに対して受け身に甘んじるだけでなく。逆にそれらの世界を積極的に描いてやろう、という意気込みが生み出した産物の1つが能であると考えます。擬人化の技法もその過程で効果的に使われています。もちろん、能が育まれた中世と現代社会には様々な差異があり、能自体も長い年月の間に変遷を遂げていますので、その点も踏まえながら、人間の自然観・世界観を解き明かしたいと日々格闘しています。

先述のように、能には妖怪めいたものも登場し、そのご縁で国際日本文化研究センター（日文研）の妖怪データベースプロジェクトにも参加させていただきました。そこで得た「妖怪学は人間学」という観点から、能に描かれる怨霊たちを捉えなおすという試みに取り組んでいます。

また、芸能という観点から見ると能と祭儀との関連は深く、各地の祭礼や芸能の調査も行ってきました。日文研に勤めました後、こちらに赴任する前は高知高専で8年間勤めておりましたので、エンコウ祭り（水難除け祈願の祭事）、土佐絵金歌舞伎（歌舞伎の屏風絵から復活した素人歌舞伎）などに会い、今も引き続き研究を続けています。そのほか、高知には、人生儀礼や祭礼において、小謡（こうたい：能の謡の一部分）を謡う風習が伝わっており、似た風習を持つ日本各地の状況と比較しつつ、大衆文化としての謡がどれほどの広がりを見せたかについても調べています。

芸能といえば、高専在職中から気になっていた AI と芸能の身体観との関連についても、この6月に研究会で発表する予定です。

なんと興味の多い、いや、節操のない人間だろう…と自分でもあきれていますが、本人は、能の世界を軸足として統一できている（しよう）と、研究に教育に精進しております。今後ともご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます

Specially Appointed Associate Professor
Indonesian Department
Graduate School of Language and Culture
PASTIKA, I Wayan (Dr.)



As an Indonesian and a Balinese at the same time my first language is Balinese while Indonesian is my second and my national language but I speak Indonesian as first language to my children while Balinese as their second language. When my children speak Balinese, they can speak only the low

level but not the high one.

I have been in my position at Osaka University since 01 April 2017 teaching mainly Indonesian language and Indonesian linguistics and these two subjects have been my majors since 1985 at my previous university. Linguistic aspects such as phonetics, phonology, morphology and syntax that may be called pure linguistics while semantics, semiotics, sociolinguistics and pragmatics which are applied linguistics are not offered separately as independent subjects in this university. They are combined together in one subject i.e. (in my department) called Indonesian Linguistics.

My research interest on linguistics involves phonology, discourse and, recently, forensic linguistics in Balinese and Indonesian. Please, allow me to mention some of my works: my book on phonology gets published entitled *Fonologi Generatif Bahasa Bali* 'Generative Phonology of Balinese' (2005) and some articles related to Indonesian phonology are published by the journal of *Linguistik Indonesia* (2008, 2015) run by the Indonesian Linguistics Society (MLI). On discourse I did some works with my colleagues in Indonesia on language of the media in Indonesia and our book on this topic gets published entitled *Dinamika Bahasa Media di Indonesia* 'The Dynamic of the Media's Language in Indonesia' (2013). At Osaka University I have been preliminary working on Indonesian forensic linguistics. On this area I have written two academic papers: "Indonesian Defamation Cases Under Police Investigation: a forensic linguistics study" presented at 1st International Conference on Local Languages (Bali, 23 -- 24 February 2018) and "Kekerasan Verbal dalam Teks Forensik Bahasa Indonesia" ('Linguistics Violence in Indonesian Forensic Texts') presented at International Congress of the Indonesian Linguistics Society at Manokwari, 13 -- 16 August 2018.

As my first time and first year teaching in Japan (or overseas in general) I was so nervous because everybody in the university is sincerely polite either verbally or non-verbally. That peaceful atmosphere immediately helps me very much to gain my confidence. Students may hesitate asking questions or do not give many comments in classes but they are generally well prepared in seminar presentations and well done in writing assignments.

言語社会専攻（ドイツ語）特任准教授
RAPPE, Guido



My name is Guido Rappe and I am a German philosopher. I started my university career as an ethnologist in Köln (MA, 1989) before I changed to philosophy and to Kiel (Ph.D., 1994). After my dissertation I visited Japan (Kyoto) for the first time as a Humboldt-scholar from 1994 to 1996. While staying at Kyodai I developed my ideas about a phenomenological grounded intercultural ethics. After returning to Germany, I finished my habilitation in Karlsruhe (PD, 1999) and worked as a professor of philosophy, teaching students and writing books. My research activities encompassed several topics focusing on intercultural philosophy, especially on ethics and phenomenology. After coming to Japan for a second time I taught German language and culture at the University of Tokyo from 2012 to 2017. I joined the staff at Osaka University in autumn 2017 where I started to teach ,Germanistik‘ (German-Studies). I like to work with Japanese students, because usually they are open minded, interested and they like to learn. In our globalized world, an intercultural understanding – and, of course, philosophical thinking – seem to be most important. I devoted my life to work on this and to develop intercultural forms of self-cultivation. Another very imported point in my life is my love for music, especially of the 20th century.